

13714

LEONTODO

N-ro 34



1966

Atg.

HEL

刊 行 辞

LEONTODO はHELのOrganoであることはすでに決定された事であるが、その創めに与えた Luksa な Gazeta としての印象を刊行するものはどうしても保存してゆきたい気持ちになる。加えて原稿のまとまり状況といったものがこれに拍車をかける。30回大会はLEONTODOはmal-luksaでもよいから回数を多く、そして中途半端なLa POLUSASTELOはやめてLEONTODOのN-YOを読けよという意見であったが、大会を契機として原稿が集積し、加えて経済状況もよくなって、オラ4号は二にLuksa 片版としての再登場ができることはよろこばしい。しかしHELはJEKの招致を決定しその運動は単にHEL大会の開催など「だけ」ではおさまらず、いよいよ広汎な運動を行う必要にせまられているので、会員各位の層の御支援をあらためてお願いしたい。大会が行なわれるたびに今迄参加者のなかつた遠方から新しい同志をお迎えすることも、又新しいグループがあちこちにできたという報告をきくことも最近では非常に多くなつたし、又HELの中心グループである札幌が非常にvigorになったことは心強いが、やはり明後年の日本大会を一つの機縁として運動を更にいちぢるしい展開段階に発展させたいものである。

第30回北海道イスラント大会記

7月9日

才一日

14:00 受付開始

予定どおり 14:00から受付開始。共済会館会議室にちらほらと親しい顔があつまり Bonan tagon! O'mia amiko! といった楽しいふん回気につてくる。ざわめきの中で 14:30から片すみで協試会(HEM役員)がはじまり、片すみでは初級試験をうけようとする人こく予習が行なわれる。16時少しすぎお待ちしていた三宅先生があらわれ、大会らしい気分が急にもしよる。三宅先生のあいさつ。——30年前の日本大会のときに会った同志と再会することたのしいが、親しい同志として若い人運に会えることは更にたのしい——とのお話。

そうそうに初級試験がはじまる。そのころ協試会もおわり 会館のあちらこちらに interkona kunsido といったところ。

さて 午後6時夕食のできよるころに 試験が終つてほつとした面持の受験者 “こんな問題た” “これでいい?” “……” といった会話でざわめきます。さて問題は —— 次頁のとおりです。

夕食後の懇親会は まづ高橋運治氏の司会で 20 demandoj —— NHKでおなじみ20のとひら —— です。Animalo, Planto (aŭ Kreskaĵo) kaj Mineralo の sugesto から 20の demandoj の中で solvoを探さなければなりません。Problemoj は次のとおりですが 難問すべてあざやかに 快答しました。

日本エスペラント学会 普通試験

1966. 7. 10. 札幌

A. エス文和訳

逐語的でなく、こなれた日本語に訳して下さい。

1. Eniru kaj sidigu, fraŭlino, Nun parolu pri vi
2. Ne rigardu min tiel zorgeme.
3. Li neniam antaŭe faris publikan paroladon.
4. Zamenhof diris, ke li ne estas sufiĉe forta por prezidi la tutan kongreson.

B 和文エス訳

1. わたしは北海道のいなか生まれ、いまは札幌市に住んでいます。
2. 北海道は日本の四つの大きい島の一つで、いちばん北にあります。
3. わたくしたちは1968年の日本エスペラント大会を札幌に招きたいと思っております。

終りに S-ro 相沢が 1936年の才24回日本エスペラント大会の8
部映画(S-ro 山根撮影)、及び S-ro 相沢撮影の 世界エスペラント
大会東京大会の記録を上映されました。日本大会は30年前のそ
うが S-ro 三宅をはじめ S-ro j 山根、相沢、木村らの苦しいお涙
がみえて、そういうお涙がみえるたび教諭をあげろといった状況でした。

7月10日

才 2 日

9:30 受付開始

や、集りがわるく 定刻を少し過ぎて開会

S-ro 川口の開会辭で LA ESPERO を齊唱。S-ro 藤藤の指名に全員
異議なく S-ro j 新田、高橋達)が prezidantoj となる。

Saluto de la prezidanto, S-ro Nitta

(要旨) 大会準備委員会のご努力に感謝し又本大会のためのわざわざ東
京からおいで下さった S-ro Mijake にお礼申し上げます。本年大会
参加者は昨年比に少しが但仍に模試会でも日本大会を招致したいと
の案を立てているようであり、そういうような案でも実際的に内容あ
る大会とし、又二のよりは模試会を契機とし本道にエスペラントをひ
ろめる運動をのぼし私達の parol kapablo を高めなければなら
ない。D-ro 山根の本年度ベスト大会参加を祝福し D-ro の
bonan vojaĝon を祈る。(※malloĝe japanigis)

Saluto de Prezidanto de Sapporo-Esp-Societo kaj
Prepara Komitato de La Kongreso, S-ro S. Joŝiharu
Bonvenon, karaj gesamideanoj el tuta Hakkajdo
de mal-proksime Hakodate, Nemuro, Uakkanai kaj
de proksime Ofaru, Tomakomae, Muroran, Utaŝinai

Obihiro, Piratori, Ilmi, Iitimizaua, Bibai kaj
Citose. Mi salutas vin, reprezentante SES komite-
ita la preparon por la 30-a Kongreso de HEL.

Al ni estas granda plezuro, ke ni povis plenumi
la taskon sed samtempe ni pardon-petas al vi pri
nesufiĉa parto en nia preparo.

Ni tre ĝojas bon-veniĝi s-ro-n Mijake el JEI en
Tokio kaj deziras havi bonan ŝancon aŭskulti
lian paroladon.

En la sekva monato, d-ro Jamaga, la Prezidanto
de HEL, partoprenos la 51-an Universalan Kongreson
de Esp. en Budapeŝto, Hungario. Antaŭ 33 jaroj (30-a 5-a jaro) esp-isto el Hokkajdo partoprenis la
22-an Universalan Kongreson en Oxford, Anglujo. Lia
nomo estas s-ro 山本佑三, instruisto de Sapporo Komerca
Lernejo. Do, d-ro Jamaga estas la 2-a partoprenanto
al Universalaj Kongresoj en fremdaj landoj. Ni elkore
esperas al d-ro Jamaga bonan kaj fruktoplezan
vojaĝon.

Saluto de Prezidanto de HEL, s-ro Jamaga

(傳言) HEL 会長として挨拶することを光榮に存じます。昨年は世界
大会を契機として UK 委員の ^{s-ro} Pompilio, svedujo からの s-ro
Olson, usono からの ges-roj Ledeen, danujo からの s-ro
Sleicher と同行の s-ro Limeda, germanujo からの s-ro Neuman
sveda junulo からの s-ro Jan Mild, そして今日は学会から s-ro

Mijake をお客様として迎えることができうれしく思います。

さて昨日の協賛会で明後年の北海道100年祭を機として日本大会を札幌にまねくという試案や、6年後の冬季オリンピックに際してエスプレントを有効に利用していたら考えなどが出ておりますが本大会を最も変革ある大会としていたたまれたいと思います。私はアテナストの世界大会に参加しますが来年の大会にこのことについてお話しできればうれしいと思います。

(malloŝge japanigis)

Saluto de s-ro S. Mijake, la sekretario de JEI.

Karaj geseamideanoj, mi tre ĝojas vidi vin kaj saluti en la nomo de JEI kaj ankaŭ mi gratulas vin en mia propra nomo. Mi dankas vin pro ke vi invitis min ~~ad~~ kongreso kaj mi dankas al s-ro Jamaga kiu ebligis min veturi al tiu ĉi loko.

Hodiaŭ matene s-ro Jamaga gvidis min tra la urbo kaj tio estas la dua fojo por mi traviziti la urbon. Mi vidis ĝin antaŭ 30 jaroj kiam okazis japona esperantista Kongreso, kaj mi vidas ke la urbo estas tre ŝanĝita sed restas tie kaj tie ankaŭ malnovaj aĵoj kiujn mi vidis antaŭ 30 jaroj. Posttagmeze mi havos okazon paroli al vi do mi finas mian saluton,
dankon,

試 事 討 論

570 木村 が 快事会議案及び決議事項を報告、異見もあつたが次の
ような決定をみた。

1. 1968年は用道100年築がありこれを機として日本エスペラ
ント大会を札幌に招致する。
2. 1967年の日本エスペラント大会には代表を派遣する。その際全
額をHELが補助する。1968年度は一部補助する。
3. 冬季オリンピック大会札幌大会1972については今からGrenoble
の同会。
に關係をつけエスペラントの有用性を一般にしめる。
4. HEL会費を地方会でまとめた場合には1人300円とする。
5. 1967年のHEL大会は小樽で行う。
6. 役員は次の通り 会長 山賀 勇

副会長 吉原正八郎

事務局長 高橋達治

地方会委員 室蘭=須藤昭三

函館=吉田 栄

苫小牧=星田 淳、北島 隆

札幌=木村喜王治、永田明子

小樽=高橋達治

岩見沢=三浦 清

HEL 事業 報告

570 高橋達治

HEL 運動次のおり。

- ① LEONTODO 1回、La POLUSA STELO 2回を刊行。
- ② 東道の fremduloj のため連絡をとる
- ③ IEA 共金発給、及び Post-kongreso en Sapporo の連絡

尚 H E L 会費納入者が 40 人と少く会費の一部値下げはあくまで会費納入者数をまし全体としての経済状態をよくするためのものであることを強調、特に各地方会員の協力を求めた。

各地方会 報告

1. 札幌 (要旨)

(A) Okazintaĝoj

- Apr 11 '65 La Ĝenerala Jarkunveno kaj Printempa Mondvida Taĝo
- Jun 21 Transdonita la mesaĝo de la prezidanto al La Mondvida Societo de Portlando en San Francisko (Pere de A. Nagata)
- Jun 12-13 Preparis la 29-an Kongreson de H E L en Sapporo
- Jul 31 ~ Aug. 6 La 50-a UK. 8 SES-anoj partoprenis.
- Okt 17 Piknikis al Barato
- Dec 19 Zamenhofa Festo kaj Mondvida Taĝo
- Apr 17 '66 La 7-a Ĝenerala Jarkunveno Mondvida Taĝo
- Apr 29 ~ Maj 2 Seminarion por Esp-movado en Sizuoka partoprenis unu membro (A. Nagata)

(B) Gastoj

- S-ro Worcester. S-ro Esuni (el kameoka)
- S-ro G. G. Pompilio (Italio) s-ro O. Olson (Svedio)
- ges-roj Ledeen (Usono)
- S-ro I. Schleicher (Danlando)
- S-ro J. Umeda (Kioto)
- S-ro H. D. Neumann (Germanujo)
- S-ro J. Milld (Svedio)
- S-ro S. C. MacGill (Novzelando)

(C) Aliaj © 1965年6月13日号の「アサヒジャーナル」と朝日新聞(北海道版)に fino A. Nagata の論文に関する記事が載せられた。

① 「イスペラント 国周遊記」などの影響もあつてほつぽつと Komencanto が参加してくるのでそれぞれに A.B.C から個人指導やるわけにそりせず指導に困っている。イスペラント 四週向と三宅氏の辞書で自習をすすめているがとにかく人数はどんどんと減つていっている。

② H.E.L. が 55 回日本大会を札幌で開くことにきめたいので私共と協力して成功させるようお願いする。(fino 永田)

2. 室蘭 12月にサメンホフ祭を祝つたが週一回例会を有する大体4,5人集つて会話の練習をしている。(s-ro 須藤)
3. 苫小牧 市民会館で講習会を行つて20人の参加者があつたが今は12,3人が残っている。(s-ro 星田)
4. 函館 吉田栄氏を会長とする函館イス会が1月に創設され16名が参加。尚且下講習会を開き20人受講者があつた(s-ro 市川)
5. 千歳 また千歳にイス会をつくつてはいないが目下星田淳氏の指導をいただいて初等講習会を開き20人集まり十数人が学習を続けている。一番新しい grupo であり御援助を願う(s-ro 中里)
6. 三愛女子高校 9月にイス会を組織。英語講師として1月に s-ro J. Milld をよんだ。目下6-8名が学習中(fino 鈴木)
7. 岩見沢 UKに4名参加。大会後 s-ro Milld が来て新聞に紹介された。目下 s-ro 浜田をはじめ皆いそがしくなつて困っているが今後積極的に運動をすすめてい。(s-ro 新田)
8. 厚賀 新聞広告をポスト一七巻紙に会員6名を集めた。日曜日に苫小牧から星田先生に系譜を願つて学習中。今後よろしくお願ひする
(s-ro 佐々木)

9. 小樽 UKに10名参加, しかし例会(水曜日)はふるわず、いつも3、4人しか集らない、近く初等講習を行う。31回HEL大会を招致することになったがよろしく。(S-ro 京橋)

(祝 鹿) ゴセイカイヲエクス 大本北海道青年部

回 文

佐藤不二雄

登 食 12:30

記念撮影 13:00

弁論大会

S-ro 川口義彦

(内容後記、極めて流暢内容も立派でした)

三宅先生 講話 (要約E1 Esp.)

司会者が *interparali aũ parolado* をということですからまず *pareleto* を致します。昨晚もお話ししたが30年前の古い同志に会うことも楽しいことですが数年前からは数ヶ月前から始めた新しい同志に会うこともたのしいことです。昨日普通試験を致しましたが、特に会話をよくこなしておられ感心しました。この傾向は日本全体にみられる傾向でおそらくUK東京大会の影響といえると思います。このUKの5年前にUK拒致の是非を論議しましたが、おそらく外人100名、日本人500~600人しかあつまるまいということで招致反対論が強かつたのですが私は勇気をもつて若い人の活躍に期待して賛成。予期通り若人達の努力で大会は成功、外人700人、日本人1000人の参加をみました。しかも日本にきた外人はこの大会に大変満足して宴会裡にUKを終ることができ、私はこの大会に立派に活躍した若い人達に感謝しています。

ところで、この若人達は5年前UK拒致が問題になったとき Esp.を知らな
 なかった。つまりUKが決定してから学習し訓練し、そうしてUKのTasko
 を十分果せたわけです。これは東京大会の大成功です。UKは今年
 はアママスで開かれるが山賀さんのほかに20人位参加します。と
 ころで連いうら横濱からUK参加のため出発する同志は山賀先生の様
 な eminentulo はづく。20人位は1、2年前からはじめた方でもしか
 も普通B.G. とよばれるような方が多いのですが、これもUKの成果と
 して持ちさめるものでしょう。来年のUKはイスラエル、次はスペイン
 のマドリドですから費用もどうわかりませんから今からお金をためて
 参加する計画を立ててください。明後年は日本大会が札幌でありますので
 忙しいでしょうからその次の大会に——^{準備}期間が長い方が貯金が果です
 ——どうぞ奮気をもつて参加してください。

終つて質疑応答のような形で *interperadado* となる。特に三宅
 先生の初算読本による学習についての討論がなされた。

余 興

1. Kanto

s-ro 川口義彦

2. Drameto

La Vendisto de Okuloj

maljunulo (La vendisto) s-ro 沢岩雄一

Vilaŝ-loĝantoj s-ro 大町文章

" s-ro 川口義彦

" fino 青木文江

" fino 小牧寿美子

3. Kanto "Kanto pri malkvieta juneco"

s-ro 星田 淳

4. Drameto

"Kiam s-ro U revenis"

s-ro U. s-ro 高橋 達治

Knabino A f-ino 高橋 Lumi

B f-ino 高橋 Ami

5. Kanto 指揮 s-ro 星田 淳

ニニハ東大留学生 (Oxford 大より) の Mikel Lamb 氏 が出席。
がぜん internacia なかんいきとなる。例によつて s-ro
Lamb に生つていたとき demando kaj respondo 形式の会
話となる。s-ro Lamb の専攻が Lingvistiko であることから
日本語、エスペラント、欧州語間の問題について意見をさく。

(s-ro 星田 通訳)

閉 会

La Taĝiĝo 首唱のあと s-ro 川口の来年は Otaru で会いませう
の閉会辞と散会 16:30 (高橋記)

才 30 回 北海道 エスペラント 大会 参加者

氏 名	住 所
三宅 史平	日本エスペラント学会
木村 喜王治	札幌市白石町大岩地 1001
榎 正子	〃 南 24 西 9
中島 久	〃 月寒 2 条 2丁目 (H 啓学寮)
菅野 憲一郎	〃 平岸 3 条 1丁目
永田 明子	〃 北 16 西 5 (昭乃)
河辺 信代	〃 南 17 西 7
吉原 正二郎	〃 旗生町 16 の 2
中村 洵子	〃 北 10 西 4
中野 長克	〃 北大通西 9
小竹 晶子	〃 南 6 西 5

沢 谷 雄 一
 小 松 弄 集 子
 藤 井 重 雄
 高 橋 要 一
 大 町 文 幸
 照 井 蝶 子
 横 山 隆 子
 青 木 文 江
 瀧 辺 桂 子
 相 沢 治 雄
 山 岸 悦 子
 上 三 八 子
 児 玉 博 子
 高 坂 知 代
 石 上 公 惠
 山 崎 勇 子
 小 泉 惠 子
 江 口 音 吉
 石 黒 実 子
 渡 辺 陽 子
 佐 々 木 郁 子
 高 橋 達 治
 LUMI
 AMI
 相 沢 誠 子
 鏡 田 陽 子

札幌市南19西10 雪印有英榮

南2西5

藻岩下377 静海荘

豊平5条4丁目 道徳任成

北7西6

南13西7 吉田方

北1西12

南7西4

北14西1 小林7三方

港川60

南7西2

白石本通791

平岸2条3丁目

南1西24

白石町本通419

小樽市花園町東3011

“ “ 西301

奥沢町1丁目

“ “ 5丁目142

“ 若竹町19

“ 奥沢町2丁目8-2

汐見台町畑2

“ “

若松町204

最上町10

早川 昇
 佐藤 不二雄
 川口 茂彦
 大沢 碧子
 沢田 真砂子
 梅村 由梨子
 北畠 瞳
 星田 淳
 村木 昭徳
 須藤 昭三
 平田 岩雄
 新田 伸枝
 中里 和夫
 新田 昌男
 阿部 誠
 市川 忠
 吉田 栄
 橋本 夕子
 辰巳 清美
 大友 鞆一
 埜川 歌一
 佐藤 明
 奥山 久子
 佐々木 敏明
 小田島 栄

小樽市 緑町 202
 " 稲穂町
 札幌市 月寒東 2 条 5 丁目 増田徹郎氏
 苫小牧市 勇払 143
 " 兼町 18
 " " "
 " " "
 " 王子 西部 2 区 56 号
 室蘭市 高砂町 2-23
 日の出町 2-356
 高砂町 199
 輪西町 1 丁目 5 の 14
 千代市 春日町 101
 夕張郡 由仁町 三川
 沙流郡 平取町 宇岩知志 岩知志中公宅
 函館市 田家町 51
 函館市 7-4
 根室市 大正町 36
 滝川市 津蓬栄
 歌志内市 本町 77
 稚内市 中通北 6 丁目
 有珠郡 伊達町 山下町 147
 沙流郡 門別町 厚賀町 公宅住先
 " " " "
 函館市 外上磯町 七重溪 391

天 辰 王 見
 子 京 村 杉
 男 威 島 高
 子 惠 雷 木 鈴
 生 高 好 慶 三
 6名

東京都渋谷区神山町20の45 神山アパート
 埼玉県 西又南
 宇都宮市峰町 279 倉島方
 埼玉県市7条西4丁目

参加人員計 71名

才30回 HEL-KONGRESO 收支決算

收 入		支 出	
会費 兩日一般	$1000 \times 31 = 31,000$	Kongres-libro	3,200
“ 学生	$800 \times 5 = 4,000$	案内状 (印刷)	2,600
(7割) 一般	$750 \times 1 = 750$	(切手)	2,080
学生	$550 \times 2 = 1,100$	会場使用料	8,200
当日 一般	$700 \times 2 = 8,400$	食事代	20,250
子供	$170 \times 2 = 340$	サービス料	2,845
学生	$120 \times 6 = 720$	接待費	4,030
一般	$290 \times 1 = 290$	菓 子	2,000
前日	$700 \times 1 = 700$	年論大会費面	200
欠席参加	$300 \times 10 = 3,000$	録音テープ	1,240
寄付金 小樽工ペラソ会	2,000	車 代	510
山 頂 勇	2,000	写真 (現像)	3,500
吉 田 栄	2,000	“ (切手代)	860
江口晋吉	300	雑費	1,456
高橋 連治	160	初級試験料	1,800
初級試験受験料 (200x9)	1,800	初年 (HELに納入)	3,789
計	58,560	計	58,560

差引 0

Pri vivkoncerto kaj homa feliĉo

Toŝchiko Kaŭaguĉi

Membro de Sapporo Esperanto-Societo

Ĝis nun, multaj personoj en la mondo asertis tian ideon aŭ skribis abunde multajn librojn pri: "kio estas la feliĉo de la homoj."

Sajnas, ke kiel niaj antaŭuloj suferadis, tiel ni en la nuna epoko havas la samajn suferojn. El tiuj suferoj, la plej adheraj al niaj koroj estas tiaj demandoj: kio estas la feliĉo de homo; por kio mi nun vivas; ĉu la nuna vivmaniero estas sufiĉe taŭga, kaj tiel plu.

Mi ĉi tie volas alvoki vin gejunulojn, prezetante mian etan ideon pri tiuj demandoj, kiun mi formis tra miaj propraj spertoj.

Vi gejunuloj, ĉu vi ne iam pensis, ke ju pli multe oni havas monon, des pli riĉe ili povas akiri feliĉon?

Mi iam tenis tian koncerton pri feliĉo. Sed nuntempe mi rimarkas ĝin tre senprudenta. Kaj feliĉkoncerto mi konkludis jene. "La feliĉo de homo estas subjektiva kaj ĝin oni ne povas juĝi objektive. Eĉ se oni konjektas, ke ne troviĝas tiel feliĉa ulo, kiel tiu persono estas, se, tamen, li mem estas olendema kaj pensas sin malfeliĉa, li devas esti malfeliĉa.

Aliflanke, tiu, kiun oni rigardas mizera kun kompatato, povas esti feliĉa, se li mem estas kontenta je sia

vivo kaj havas riĉan koron. Homa vivo apartenas al neniu alia, ed al si mem. "Neniu havas rajton enstrudiĝi al alies feliĉo aŭ bari aliajn de la serĉado de feliĉo."

Do, karaj gejunuloj, ne timu barojn kaj malesperajojn, ĉar kiam oni home ce plialtiĝas, tiam antaŭ ili kuŝas multaj baroj, kaj trapasante tiujn ili povas konkeri sian tutan vivon. Ni devas scii, ke ni kun senlima spirito naskiĝis por nur suferadi kaj ĝoji. La plej eminentaj personoj povas akiri ĝojegon tra suferado. ju pli ofte oni renkontas al diversaj okazoj en la homa vivo, des pli grande ili malesperas se ili havas des pli belajn songojn. Malespero kune ekzistas kun la homa vivo. Kiu neniam malesperas, tiu, en iu senco, estus nefidinda, ĉar kiu estas kontenta je malgranda sieco, tiu neniam sentas malesperon. Se vi prizorgus nur viajn feliĉojn, vi estus tre mizeraj.

Denunaj gejunuloj estas dezirataj vivi kiel brulanta kandelo, kiu lumigas aliajn, sin bruligante.

Karaj gejunuloj, tenu klaran celon por via vivo, kaj rekte paŝu la vivon, kiun vi pensas korekta, dankante pro tio, ke vi hodiaŭ vivas. Nur tion klopodante, vi fariĝos havulo de grandioza koro kaj via vivstato fariĝos fakte bela.

Fine, mi devas paroli pri ni esperantistoj. Miaj karaj samideanoj! Ni esperantistoj povas ja sperti pli feliĉoplenan homan vivon, ol tiuj, pri kiuj mi jam menciis.

Ni devas fariĝi kosmopolitanoj havantaj grandskaran
esperon, rigardante la malvastecon de la vidkampo de la
japanoj.

Ni kontribuiĝu por disvolviĝo de la homaro en la
internacia socio. Laŭ tio, ekbrilas senlime nia estonteco,
kaj la tuta popolo de la mondo atendas de la homaro, ni
esperantistoj ja antaŭenigu nian sanktan movadon larĝe pli
profunden.

Konklude mi volas ĉesigi mian paroladon per miaj plej
amataj vortoj: "Ho, mia vivo, mi amas vin!"

Koran dankon.

Joŝihiko Kaŭaguĉi

Merkredo 20-a julio, 1966-a

Par la 30-a Kongreso de Hokkajdo Esperantistoj.

KIAM S-RO U REVENAS.....

(Dramato prezentita pov La 30-a HEL kongreso de

S-ro T.Takahaŝi)

Kurteno leviĝas

2 knabinoj ludas sur la sablejo de iu marbordo.....

kaj tie proksimiĝas krepusko.---ĉielo kun vesperiĝa

brilo. Iom poste.....unu knabino stariĝas

Knabino(A) stariĝas

"Jam la suno subiras kaj estas tempo iri al la domo"

Knabino(B) ekstaras

"Jes, ni iru hejmen"

Ili mano-enmane promenas, kantante:

"Kiel bele etendiĝas vesperigâ bril!

Kaj eksonas de la monto vespersonoril,

Man'en' mano ĉiuj kune hejmen iru ni,

Ankaŭ korvoj irus hejmen same kiel ni."

aŭdiĝas aluvoko de unu viro

"Atendu, karaj knabinoj. atendu, unu momenton!"

2knabinoj sin turnas. unu viro aperas kun, kesto

en maldekstra brako kaj fiŝ-kapta bambuo sur dekstra ŝultro.

Viro tre gaje

"Karaj knabinoj, karaj rigardantoj.

Ĉu mi aspektas tre moderna kaj ĝentila?"

(li atendas ilian konsenton)

2 knabinoj, duone konsentante

"Jes, sed iom stranga....."

Viro.

"Ĉu jes? Jes, ĉar mi estas ĵus-reveninto

de prospera loko, laŭ la alia lingvo 'JOKO.G'ERI'

Knabino(A) montrante (阿部 みの)

"Sed, ĝi estas stranga....."

viro

"O, jes ĉar mi revenas el Dragono-palaco

laŭ la lingvo de maro-fundo 'RYUGU'

kaj tie tiu kostumo estas populara en la
nomo " Ŭaikiki Stajlu "

Karaj knabinoj, ĉu vi ne konas min?

Mi estas nomata URASIMA-TARO, tre fama
sinjoro en marfundo.

Knabinoj ".....?"

URASIMA

"Mi naskiĝis en tiu ĉi vilaĝo....."

Rigardante ĉirkaŭen.

"Ŝanĝiĝis ĉio O, kio estas tiu grandega
kastelo?"

Knabino(A) "Ne kastelo"

"Tio estas urbodomo"

URASIMA

"Urbo.....?" Ĉi tie estas urbo?"

"Kio estas la altegaj turoj kun blanka vaporo?"

Knabino(L)

"Tio estas fabriko de papero"

URASIMA

oni jam ne faras paperon el ligno kaj akvo.....

oni faras paperon el vaporo!

O, Kiel multe ŝanĝiĝis ĉio en nur 3jaroj

(al la knabinoj)

Ĉu vi ne konas s-ron URASIMA TAGOSAKU,

mian patron?

Knabino(A)

Ne, Mi ne konas.

URASIMA

Ĉu vi ne konas Momotaro, mian amikon?

Knabino(B)

Ne, Mi ne konas.

URASIMA

Ĉu vi ne konas Hanasaka Jiisan
kiu estas amiko de mia avo.

Knabino(A)

Mi ne konas nuntempe, sed scias
tiuajn nomojn en la infana libro

URASIMA. (maltrankviliĝa)

Vi ambaŭ neniun konas. Ĉu ili jam
ne loĝas en la loko?

(AL la infanoj)

Vi neniom konas min, do, mi parolos jom ori mia
historio, Mi naskiĝis en la loko kaj fariĝis juna
fiŝkaptisto.

sed iun tagon antaŭ 3 jaroj, mi promenis sur
la marbordo, tiam mi trovis ĉiujn knabojn
kiuj turmentis malgrandan testudon.....

kompatiuda testudo!.....mi donis monon
al la knaboj kaj li-berigis la testudon en
la maron:!!.....

Sekvintan tagon, kiam mi fiŝkaptas sur
la maro, tiam granda testudo aperis sur
la maro, kaj ĝi estis patrino, de la malgranda
testudo. Ŝi multe dankis al mi kaj petis
al mi rajdi sur ŝia dorso por prezenti min al f-ino
Otohime. Ŝi gvidis min en la maron.....

Knabino(L)

Tian rakonton mi aŭdis de mia avo
sed tio okazigis antaŭ 300jaroj

URASIMA (surprizite)

Ĉu tio okazis antaŭ 300jaroj?

Knabino(A)

Jes, antaŭ 300jaroj

URASIMA

Kalendaro en marfundo kalkuras nur 3jarojn.

Knabino(L)

1jaro en marfundo estas cent jaroj sur la tero.

URASIMA (ekstaris pro surprizo)

300jaroj pasis!

Mi estas pli ol 300jaroj!

Mi pasigis tre gajan tempon ĉe RIŬ GŬ.

Laŭ la gvido de Otohime mi estis tre feliĉa.

Mi manĝis la olej bongustan manĝaĵon, vidis bonegan

dancon de fiŝoj kaj aŭskultis belejn muzikojn da

akvofluo tamen mi fine deziris reveni,

Ĉar mi deziris revidi miajn gepatrojn.

Sed jam pasis 300jaroj!

Jam mortis miaj gepatroj!

Jam mortis miaj amikoj, ĉiuj konatuloj!

Mi estas sola sur la stranga, moderna tero!

Jam mi perdis esperon vivi pli longe.

Mi malfermos la oron keston kiun f-ino Otohime al mi
donacis

(Li malgaje, malrapide malfermas la keston

-----BLANKA FUMO-----)

(iom poste)

Ĉu miaj hararoj blankiĝas?

Ĉu miaj lioharoj blankiĝas?

Knabinoj

Ankoraŭ restas nigraj.

URASIMA

Ĉu.....?

Knabinoj

Ankoraŭ restas nigraj, sinjoro

URASIMA

Ĉu vere,

Ankoraŭ restas nigraj hararoj kaj lioharoj?

O, karaĵ rigardantoj (al la rigardantoj)

Pardonon, ĉar mi eraris en la drameto

(al la knabinoj)

Sed karaj knabinoj

Mi estas tre ĝoja ke mi restas ankoraŭ juna kun
nigraj hararoj

Mi denove havas esperon vivi en tiu granda urbo.

Karaj knabinoj, bonvole gvidu min al la urbo----

2 Knabinoj

Volonte, sinjoro

Ili promenas kun la kanto

' Kiel ronda kiel gronda montras sin la lun '

La infanoj ĉiuj hejme pace songas nun.

Ekarĝentas jen steletoj sur la nokta ĉiel.

Infanetojn kaj birdetojn gardu la anĝel !

Pli kaj pli vesperiĝas kaj kurteno falas.

Sed ili volas unuigi la mondon...

Lingva diskriminacio ĉe la mondfederalistoj

Akiko NAGATA~

(F-ino Akiko Nagata, raportis sian elpenson ĉe la esperantista mondfederalista fakkunveno de la 50-a Universala kongreso en Tokio lastsomere. Konsekvence ŝi sendis la kopion de la raporto al estrarano de Tutmonda Esperantista Junulara Organizo (TEJO), kaj li utiligis ĝin ĉe la seminario de TEJO okazinta en septembro 1965 en Ljubljana, Jugoslavujo kaj poste ŝia raporto estis aperinta sur la N-ro marto 1966 de Germana-Esperanto-Revuo.)

Mi raportos el lingva vidpunkto pri la 12a Monda Konferenco de Mondfederalistoj okazinta en San Francisco, Usono, de la 21a ĝis la 26a de junio 1965, kiun mi partoprenis. Kiel vi ĉiuj supozas, oni havis nemalmultajn lingvajn problemojn. Angla, franca kaj japana estis oficialaj lingvoj kaj samtempe interpretitaj unu en la aliajn. La kialo, kial la japana lingvo estis unu el la tri oficialaj, estas, ĉar la plej granda nacia delegacio krom usona estis la japana, 180 personoj.

Englutis aeron ŝvitante

Dum samtempe interpretado oni uzis elektronikajn aŭdilojn. Kiel oportuna estis la sistemo? Neatenditaj problemoj troviĝis krom tio, ke oni sentis sin dolora je la oreloj dum la longa uzado de la ilo.

En la unua ĝenerala kunsido, la 21an, unu usona parolanto legis sian paroladon tre rapide. Iu el interpretista budo iris al la podio por malrapoⁱdigⁱ la paroladon. Mi aŭdis, ke japana interpretisto rapidege parolis kaj englutis aeron ŝvitante, eĉ kiam la parolanto ĉe la podio malrapidis. En la sama kunsido franca eksministro Robert Buron parolis la unuan parton kaj la finan en la angla lingvo kaj la mezan plejparte en la franca. Kiam franca-japanen-interpretisto deĵoris, dum angla-japanen-interpretisto ripozis, S-ro Buron ofte forĵetis anglajn frazojn por amuzi la pli vastan usonan aŭskultantaron. Ofte eksplodis ridoj de la usonanoj. Sed japanoj sidis mutaj, inkluzive de mi, ĉar la interpretisto ne interpretis anglajn frazojn forĵetitajn de la parolanto. Nokte en la sama tago okazis junulara plenkunsido. Oni havis elektadon de konsilantaro por Junulara-Studenta Sekcio de la Mondasocio de Mondfederalistoj. Vicsekretariino de la Sekcio, F-ino Karin Jonsson, klarigis angle pri la elektado, disdonante presajojn, pasante inter la aŭskultantaro. Tiam la elektronikaj aŭskultiloj ne funkciis, ĉar interpretistoj ne povis aŭdi ŝian voĉon. Ĉar ŝi ne uzis mikrotonon. Do, japanaj junuloj ne povis bone kompreni, kion ŝi parolis, kaj ili lasis sian voĉdonrajton. Konsekvence de tio neniu japano estis elektita en la konsilantaron.

Esperanto en armeo de UN ?

En la junulara kunsido, reprezentante japanan junularon kaj studentaron, mi parolis en la japana lingvo dekelkajn minutojn pri mia eseo, kiu ricevis la unuan premion en esekonkurso de Japana Unuiĝo por Mondfederacio kaj temis pri la konstanta armeo de la Unuiĝintaj Nacioj. Tiam mi paroletis pri lingva problemo en estonta konstanta monda polico de UN fondota sur bazo de volontuloj el la tuta mondo, senkonsidere ĉu ili venas el ŝtatoj membriĝintaj aŭ nemembriĝintaj. Denove mi proponis, ke ni mondfederalistoj fondu iun organizon por studi kaj solvi la lingvan problemon kaj havi ian komunan lingvon kiel Esperanton por uzigi ĝin inter la soldatoj de UN. *)

Post mia parolo unu fraŭlino nederlanda, Truus Zwart, sidanta apud mi alparolis min en la angla lingvo:

"Internacia Lingvo Esperanto estas vere bezonata en ĉi tiu kunsido mondfederalista." Tuj post kiam mia parolado finiĝis, usona esperantisto, Paul Hartley, kiu loĝas en San Francisco, petis la prezidantaron doni iom da tempo por raporti pri la disvastiĝo kaj utileco de Esperanto, kaj li informis, ke Universala Esperanto-Asocio jam estas unu el la konsilantaj organizoj de UNESCO.

Malegaleco inter mondfederalistoj

Post du tagoj, la 23an, oni havis fakkunsidojn en

malgrandaj ĉambroj, kie oni ne uzis elektronikajn aŭdilojn, Mi partoprenis edukan fakunsidon, kiun prezidis F-ino Monica Wingate, profesoro de kolegio en Anglio. Duono de lapartoprenantaro estis japanoj. La prezidantino postulis al ĉiuj, ke ili legu sian raporton angle skribitan. Unu japano, kiu povas paroli anglan lingvon, petite tradukis la raportojn en la japanan lingvon por japanoj laŭvoĉe. Tiam la prezidantino murmuris malrespekteme en la angla lingvo ---kion malfeliĉe mi povis kompreni---ke japanoj ĉiam bezonas tre longan tempon por fari ĉion. Laŭ ŝia opinio la kunsido estis dividita en du grupojn, nome por la japanoj kaj por la aliaj.

Tial en la sama ĉambro malgranda oni diskutadis aparte, kaj almenaŭ 2 lingvoj zumadis senorde.

En la ne-japana grupo angloj kaj usonanoj diskutadis pli vigle kompare kun alilandanoj, ĉar usonanoj kaj angloj sentis nenian malkonvenecon en la uzlingvo. Ankaŭ tie troviĝis iom da malegaleco inter nacioj.

Kiam la japana grupo konkludis pri la proponoj, tiam la alia grupo disigis for, krom kelkaj personoj. Tie nenian signifon havis kune sidadi por diskuti inter homoj el la tuta mondo.

Denove F-ino Wingate postulis al la japanoj prezenti unu reprezentanton, kiu havos laboron kontakti kun ŝi. La japanoj elektis unu sinjoron laŭ ŝia deziro.

Tiam ŝi demandis, ĉu la sinjoro parolas la anglan aŭ ne, kaj se ne, alia persono devas esti elektita. La japanoj elektis krom la sinjoro alian, kiu povas paroli la anglan. Laŭ tia vidpunkto ankaŭ japanoj povus postuli al F-ino Vingate, ke ŝi parolu la japanan aŭ ke ŝi dungu tiun, kiu povas paroli ĝin, sur bazo de egaleco de la 3 oficialaj lingvoj, ĉu ne?

Kondamnita al silentado

La 25an oni hevis Junularan Konsilantaran Kunsidon, kie oni ne uzis elektronikajn aŭdilojn. Malgraŭ ke neniu japano estis elektita ĉe la unua junulara kunsido al la konsilantaro, dank' al la kontakto de esperantistoj en Kalifornio mi kaj aliaj du, unu el ili kiel interpretisto por mi kaj la alia, povis reprezenti la Junularan Fakon de la Japana Unuiĝo por Mondfederacio. Ĝis tia tago pasis jam kvar tagoj de la malfermo de la Monda Konferenco. Partopreninte multajn kunvenojn ĝis tiam, mi ekpensis, ke japanoj ne devas mutadi. Kiam en la konsilantara kunsido oni ekdiskutis pri la armeo de la Unuiĝintaj Nacioj, pri kiu mi havas grandan intereson, volante scii perfekte, kion oni opinias, mi aŭskultis la interpretiston, kiu sidis apud mi. Sed dum la interpretisto parolis al mi, aliflanke estis daŭranta diskutado en angla lingvo. Pro tio mi ofte demandis japane, levinte la manon, kion opiniis la parolintoj aŭ la parolanto. Tiam unu observanta japano riproĉis min dirante, ke mi silentu.

Li verŝajne ankaŭ ne komprenis angle diskutitajn agerojn. Unu aŭ du fojojn mi povus silentadi. Sed mi ne povis pasigi la tutaĵn kunsidojn kiel surdulino aŭ mutulino.

Komitato pri la lingva problemo

La japana lingvo estis unu el la oficialaj lingvoj. Povi paroli unu el la oficialaj lingvoj estas havi specon de privilegio. Mi ne volas uzi la privilegion. Tamen tiuj, kiuj ne komprenis la anglan lingvon perfekte, mi pensis, havis rajton demandi kaj kompreni la respondon en la japana lingvo tiel, kiel usonanoj aŭ angloj havis rajton kompreni en la angla. Post iom da konfuzo F-ino Truus Zwart, konsentante pri la neceso de internacia lingvo, proponis fondi komitaton por la lingva problemo.

Oni decidis fondi la komitaton kaj elektis ses komitatanojn. La komitato estas devigita studi kaj solvi lingvajn problemojn en la organizo dum unu jaro de tiam.

Mi informiĝis, ke 40% el la tuta elspezo de la Konferenco estis por samtempa interpretado. Tial la lingva problemo estas grava ankaŭ ekonomie. Estas tutcerte esperinde, ke venu la epoko, kiam oni neniam elspezos por tio.

LA HAVENO ALBU

Poemo de Uzyo Noguti
Muziko de Sinpei Nakayama
Traduko de Kikunobu Matuba

Merbotadaj kormoranoj
hejmevenas en vesper'
dum ĉi haven'rugfojras
jen en sunsubira hel' ĉ---
Ĉu morgau sur la mero
Yare hon ni sa
regos la trankvil' ?

Soleca estas viro
certe tie sur l'insul'----
La posta ŝipo peras
inter Izu kaj vi nur;
per vent' spensu audas
Yare hon ni sa
pri Simoda vl.

Uĝite aĉ ŝipeto
sin preparas por ekrem'.
Knebinoj de l'insulo
en l' insurir' de l' Senkte Flam',
kun kia sentimento
Yare hon ni sa
spudstaras nun?

Jen blovas miron vento
el la monto subkte plej .
Knebinoj de l' insulo
ce fisista ŝiptenej'
malligis la ligensuron
yare hon ni sa
kun amara plor'

秘められたる 終章

(ESP 史上のエピソード)

星田 彦

ザメンホフの語のうち ESPERO は我々に親しみ深い式典歌 La Vojo, Al la fratoj を親しんでいます。ところで Fundamenta krestomatio にも出ては、割と知られていないが Boulogne-sur-mer の第一回世界大会(1905)で Zamenhof 自身により朗読された、従つて世界で初めて世界の esp-istoj の前で朗読された語があります。題して Preĝo sub la verda standardo。この敬けんな祈りの語は今迄5節の語として引用されていましたが実は6節。「最終章が除かれていたのが後で発表になった……」と解説付きで坂中崎益敏編のザメンホフ読本(JEI 発行)は、この Lasta strofo だけをのせています。

1905年7月末この大会のためフランスに着いたザメンホフがパリでの歓迎宴、会食、レジオンドヌール勲章授与など フランスの 에스ペラント界指導者のおぜん立てのプログラムに追われ 8月4日夕方大会の地に疲れて帰つてきました。この時 ミシヨ、ブールレ、ジャヴァル、セベールらフランスのエスペラント運動の大立物たちはザメンホフの大会演説原稿を拝見した上で 彼の言動にワクをはめようと待つていたのです。

帝政ロシアの絶えぬ圧迫の下にあつたスラブ世界からはじまつたエスペラント運動が当時の先進国フランスにひろがり、運動の主流がそちらに移つて来た時でした。フランスの指導者たちは皆知知人で、大いにエスペラントの有用性を宣伝して、ひろめようとしていたのです。その目で見ればあまりに空想的な——宗教的ともいえる情熱にみちたザメンホフの原稿はどれも困つたものに見えたのです。

もう一つわるいことが起つていました。ドレフォス事件です。このエジ

メ人砲兵大尉のスパイ容疑事件に対し、右翼団体、軍部はユダヤ人の売国
行爲として反ユダヤ運動を始め、一方知識人、自由主義者たちはデツチ上
げとして軍部を激しく攻撃。この後デツチにゲの専横がだんだん明らか
になり、1906年にドレフェス大尉は10年バりに無罪釋放——と日本で
もあつた占領下の怪事件に似ていますが、当時のフランスはこの事件、か
いてはユダヤ問題で二つの陣営に分裂したような状態だつたのです。エ
フフ、セバール、シマザアルはドレフェス派、ブールレ、ド・ボーフロンは
反ドレフェス派といわれるように Esp-ujo も決して無関係ではおれなかつ
たのです。シマザアルは彼自身もユダヤ人だつたため、この問題には退
却せられた。二つう時に干渉者かうのユダヤ人が来て、大衆の前で「神」
などという言葉を出すと、とんでおない——と彼等は考へたので
す。

彼の詩も、これは「祈り」ですから当然「神」に捧げることは。しかし
原文では Fortegon, la mondon reganta とか Vi, Forto
mistera という言葉であらわしてありますが、問題の最終節に *Ry Di?*
と出て来、しかもこれが

*Kristanoj, hebreoj aŭ mahometanoj
Ni zinj de Di' estas filoj*

とあつたのには、お愿ひ小るえ上げつてしまつたのです。それ迄の内容も
も基調は La Esperoと同じようなもので Forto mistera, La
mondon reganta に対して捧げる形なのですから、こゝで二つ具体的
にいわれたのでは……「大さわぎになりますよ!」「金場ではぐり合
いが難まつたらどうします」「あゝ、言葉はだめだ、あの詩もやめ
べきです」サメンホフは正につるし上げの形。彼はフランスこそ自由
の国と信じて出て来たのですが、彼の考へなところとかなり違つていた
のでした。結局この詩の最終章の 刺戟だけに彼は同意し、こゝにだけはし

ばらく収められた一章となつたわけです。

1905年8月5日夜の彼の丁史の演説は、この終章なき詩の朗読をもつて終り、688人の参加者の熱烈な歓呼をあげたと記録されています。

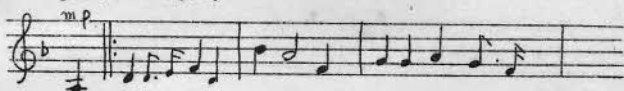
Kanto pri malkvieta juneco

(心さわぐ青春のうた)

Versoj de L. Osanin

Muziko de A. Pahmutova

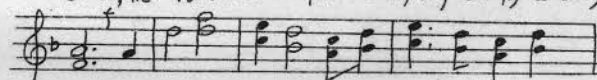
En ritmo de marŝo



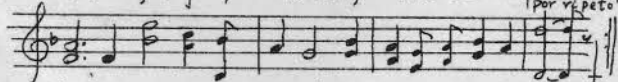
1. O - ku-pas nin zor-go ni-a, O - ku-pas zor-go nin



ti-a; ke vi-vu la ter' pat-ri-a, kaj zor-voj a-li-aj



for. kaj neĝ. kaj ven-to, kaj bril' de ste-la



hor', kaj vastoj sen-li-maj vin vo-kas nun mia kor'!

2 Mi

2. Minacas al ni danĝero,
Sed nin ne lasas espero
Kaj restos ja ni en vero
Amikoj ĝis lasta hor'



kor'!

Retreno: kaj neĝ', kaj vento
kaj bril' de stela kor'
kaj vastoj senlimaj
Vin vokas nun, mia kor'!

3. kaj dum mi je lr' kapablas,
kaj dum je vid' mi kapablas,
kaj dum je spir' mi kapablas
Mi marŝu ja kun fervor'

Retreno

4. kaj iam en vent' kaj flamo
Feliĉe trovos vin amo
Ĝi guidos vin por ĉiamo.
Neniam vin lasos for.

Retreno

5. Ne, ne, ne vin penso eta
Ke vivo iĝis kvietaj,
Al cel' via estu preta
kaj trovos vin via glor'

Retreno

Lingvaj Demandoj ĉe ni

Zamenhof

★ Okaziĝi : okaziĝi ... ?

この類のコトバを誤って使う人が実に多い。okazi がもとごと
(事が)起こる、という自動詞だから、わざわざこれに更に自動詞化の

-iĝ-などつけて *En mia urbo okazigis kurso*... なんていえば、何か自然現象の如く kurso が おこら サツ ツ み 天 い な 感 じ。一々これはまだいい方。

(1) *En mia urbo okazigis kurso*... とか

(2) *En mia urbo okazigis kurson*... とか、いうのも聞か(1)では kurso が何かを起したことになるので意味不明。

(2) ではまだましだが mi *okazigis*, oni *okazigis* のように主語がなくては アタマなし、これでは麻省でもあがれない 文の場合は形なしとなる。

ところがこの単語のそとの形 *okazi* を使う人が少ないのは如何にもアシクなこと。なんでわざわざ難しい形にしてしかも意味不明の文を...?

「私たちの市で講習会が毎週木曜開かれています」なら

En mia urbo okazas kurso ĉiujarde

又は 我々が(やっている) = (拵っている) なら

En mia urbo ni havas kurson 又は *ni komencis kurson* のようなカンタンな表現の方がずっとわかりやすい。

★ *interesiĝa*??

Ĝi estas interesiga afero... なんて書いて考えれば考える程に意味がわからなくなつたが、どうもこれ又いらぬにネクリ廻しのよう。

interesa がそもそも「興味をかく、興味を起させる」の他動詞だから、「それは興味ある一面白い一事です」なら *Ĝi estas interesa*

(*afere*) で充分。それから「私は〜に興味をもち」なら *Mi*

interesiĝas pri ~。又これは即ち「〜が私の興味をかく」だから ~ *interesas min* のような表現、最高に簡潔明瞭、文もスマートではありませんか?

☆道産子弁又よからずや

さつきの -iq- で思い出した。これを日本標準語 (Oni diras tion, Zamen, ofte …… 笑は東京方言の事か？) でどう訳する？ 「…になる」 (自動詞化) なんて時々その本にかいてあるが 北海道人のコトバとして全くこれと同じ意味の接尾語があるのを思い出していただきたい。つまり「…サル」というコトバだ。私の見限りでは「-iq-」と「-サル」は用法、意味とも一致しているようだ。次の例を見られよ。

turni (まわす) turn-iq-i (まわら-サル = まわる)

ŝanceli (ゆする) ŝanceliq-i (ゆら-サル = ゆれる)

movi (うごかう) moviq-i (うごか-サル = うごく)

「-サル」なるドナンコ弁はその中に無意識的な動作、受身的な意味がある (怒りのあまりいろいろのなかつた言葉をつい) 言ワサルとか (何かにかかれてそこへ) 行かサルンダ、(ピラガ) ハラサツテアツタ、(本が) 積まサツテル等の表現と Plena Vortaro にある iq-i の説明 "esprimanta per si mem ŝanĝon de stato, ne precizigante ĉu la kaŭzo de tiu ŝanĝo estas ekstera (trudo, nepersona forto) aŭ interna (konscia aŭ senkonscia volo, evoluo) の類似臭はなかなか面白い。このサルもウラル・アイルタイ語と日本語を結びつける資料のひとつになるという説もあるとか。

Leontodo N-ro 35 (10月10日版)

原稿募集

(次回/切) 9月20日迄

Ni fondu la Naturamikan Esperanto-fakon en Japanujo

児玉広夫

今私はスイスの Langenthal に住むイスペラントリスト Manfred Führer との文通が機縁で La Jurista Asocio de Naturamikoj (TAN) と TAN の Esperanto-fako (TANEF) の存在を知り彼はもちろんのことチューリッヒに住む TAN の sekretario, Hans Welti やベルギー在住の TANEF の Prezidanto Piet van Sittren さんから日本に TANEF を設立するよう熱心な勧誘を受けている。そしてこれに固心を寄せている数人の日本の方々の名前を紹介し、これらの方々との kontakto を強く望んできている。

Turista Asocio de Naturamikoj とは自然を愛とし自然とともに親しむグループの国際的を連合組織であり、会員は海に山に ekskurso や rondvojaĝo を行ない ときに登山、スキースポーツ、海水浴等を楽しんで会員相互の親睦を深める健全な団体であるようだ。

たまたま私は本年3月スイスの Manfred さんから Naturamika Federacio Internacia の設立70周年を記念して発行された64ページ(29.5×21cm)に及び美しい挿絵、写真入りの broŝuro の寄贈を受けた。この broŝuro には独仏蘭、英語のほかにもイスペラントでも書かれており、もちろん挿絵写真の注釈も全部イスペラント書きであったため各国の Naturamika movado の aktiveco などを大へん興味深く知ることができた。

それで私は彼の好意ある寄贈に感謝して「わが国でもこのグループが出来て各国の同志と交流ができればどんなに素晴らしいことだろう」と書いて

出したものだから、たちまちその影響を呼んで本年7月までに7通の varb-
leteroj、20部以上の varbbroŝuroj や TANEF の Informiloj が
多数送られてきたわけである。

そんなことで 에스ペラント運動に関連する TAN の最近の動きを知ること
ができたのであるが、これによると TANEF の最近の発展は目覚ましいもの
があり昨年8月19日から21日までコペンハーゲンで開催された Naturamika
Federacio Internacia (NFI) の大会では Esperanto-fako の
TAN の運動に貢献した役割を高く評価し国際語 에스ペラントを支持する旨
の決定がなされたこと、毎年の NFI の大会は UEA の大会後の8月中旬に
(本年はオーストリアで)開催されているとのことであった。

そして彼等は TANEF が日本に設立されたとすれば TAN は Europano
のみのものであるとの一般の誤解からより国際的なものであるとの理解が深
まるであろう、それのみでなく 에스ペラントの存在価値を世界に認識させる
絶好のチャンスである。そのため設立された日本の TANEF がやがて NFI
に加盟する際は「われわれが国際的行事に参加する場合は 에스ペラントを公
用とする」旨の宣言をすること、NFI の estraro に再認識させる効
果的な一方法であるとの意見も寄せられている。しかしその反面 TAN は
決して 에스ペラントリストのためのみ存在するものでないから国内における
運動のすすめ方としては初めに ekskurso や rondvojaĝo を集め、
自然に 에스ペラントを自ら学ぼうとするように仕向けるべきであろうとベル
ギーがこの方法によつて成功した例をのべている。

いずれにしても TAN の運動が別に難解なイデオロギーから発しているの
ではなく人由は自然とともにより自然に復るものである。だから自然を愛し
ていこうというような素材を希いからきているように、そしてこの運動がよ
り国際的な方向に発展していくにつれて、これと並行して 에스ペラントの存

在価値が漸次高まりつつあることも事實のようである。

それで私は思う。わが国でも TANEF が結成され毎年の UEA の大会後に開かれる NFI の大会にも Karavano を伴って Migrado することは どんなに痛快なことであろう。また来るべき (1972 年、北海道の札幌市で開催される冬季オリンピック大会を契機にこれ等各国の同志が多数訪れて交換親善を行なうことができれば) どんなに素晴らしいことであろうかと。

(一後記) お 願 い

スイス、ベルギーの友から紹介された次の方を御存知の方は御一報下さい。TANEF の設立について相談したいと思います。またこの会の設立に御賛同の意見等をお寄せ願えれば大へん幸甚に存じます。

1. samideano Saito Eizo
Simo Maruja-tyo Kwaremati-Oike
Nakakio-ku Kioto
2. samideano Hasekura Hayato
215 Oi-Hayasi Shinagawa, Tokio
3. samideano Matsumoto Kiyosi
(Mar-instruisto)
Kikusui-5N 26-6 Hyogo-ku, Kobe
4. samideano Cohasi Jasuji
SeeS-rjoo, Nicui Seeki
100 SimcomaruloCo, Ootaku Tokio

連絡先

東京都渋谷区神山町 20 の 45

北海道神山アパート / 号 関玉広夫

Nia Prezidanto Vojaĝas tra Eŭropo!

Nia prezidanto de HEL, D-ro 山根は目下世界旅行の途上にあります。14日にわたる長い旅行ですが、その予定は次のとおりです。

7月28日 東京発 → アンカラジ → コペンハーゲン

(S+O ショライベル定に泊る)

7月31日 ~ 8月4日 ブダペスト

オ51回 世界エスプラント大会参加

8月5日	コペンハーゲン
7日	ストックホルム
8日	ハンブルグ
9日	アムステルダム
10日	ロンドン
11日	パリ
13日	デュセルドルフ
14日	ミュンヘン

オ20回 国際眼科学会参加

16日	ウィーン
17日	チューリッヒ
18日	ジュネーブ
19日	チューリッヒ
20日	ミラノ
21日	ローレンス
22日	ローマ
23日	ローマ、ポンペイ
24日	アテネ
25日	カイロ
26日	バタコフ
27日	香港
31日	台北
2日	東京
3日	小樽

尚 8月2日 ブダペストから次のようなお便り

「 Kongres-Libro には登録 3777人、実際は 4000人以上。大会場を埋めつくしたばかりでなく、街中 Esp の吹流しが各所にあり、ラジオも新聞

そしはは伝えテレビニュースもやり市内の交通手段は無料パスを出して
います。はじめホテルに泊るはづがでなくなり郊外の個人宅に2泊、次
で市内の個人宅に4泊ということになり、その他の家産にも招かれ何
れもその生活の豊かあのに驚いています。」

又 続いて 8月10日 ロンドンから

「ブタベストのイス大会を8月4日で切り上げベルリンに入ったのですが
先に西(ベルリン)のヴィテンスキーという人に手紙を出しておいたら東
ベルリンの大学眼科教授に連絡してくれその案内で大助かり、次いでアム
ステルダムでは V Dalen 氏に頼んでおいたら快く出迎えて住所を見て
週りアネの家まで訪ねることが出来ました。すべて Esp のおかげで同行
の眼科の先生方からうらやましがられています……」

Dno の一刻も早い帰郷、そして豊高な待遇についておききたいもの
です。

(T.T)

米戸(?) 氏に

(連絡費にでも……)とお送りの 2000 円、たしかに受領致し
ました。有効に使わせていただきます。但し御住所がわからないので
この LEONTODO をお送りできないのが残念です。どうぞ、
御住所をお知らせ下さい。

(Syo 米戸 という方が 住所氏を 誤りなく 札幌中央局から
2000 円入の普通郵便を上のような理由で送って下さったのです)

(事務局)

HEL 会計報告

(41.4~8)

前回報告残(繰越) 28,188

収入 会費(嶺正子)	400	支出(La Polca Stelo)	2400
(木村喜王治)	400	(用送料)	820
(吉原正八郎)	400		
(山崎九蔵)	400		
(相沢治雄)	400		
(市川 忠)	400		
(山野喜美子)	400		
(加賀佐太郎)	300		
(吉田栄五郎)	1500		
(吉原正八郎)	400		
(川口 義彦)	400		
(木山 昇)	400		
(山岸悦子)	400		
(平田若唯)	400		
(大友朝一)	400		
(北島 瞳)	400		
HEL27回大会残	193		
Post JK 残	790		
HEL30回大会残	3789		
寄付(米戸女)	2000		
計	42360		3220
差引残(次期繰越)			<u>39140</u>

上記の報告通り多額の収入を得たわけですが LEONTODの発行、JEKの招致と更に多額の支出が予想されますのでよろしくご協力をお願いします。会費は個人分が年400円、団体納入分が300円となっていますが、御送金は現金書留をお使い下さるか郵便小存箱(小樽奥沢局E河橋定下さい)をお使い下さると有難いのですが、下記宛にお願いします。

小樽市 汐見台町一
小樽海星学校内 高橋 達治

第30回北海道エッセイ大会記		2
Pri vivkoncepto kaj homo feliĉo	Toschiko Kōkōguchi	17
Se ili volas unuigi la mondojn	Akiko Nagata	26
秋の夕べ ^終 舞	星田 淳	33
Kanto pri malkvieto juneco (七姉(有る)の七)		35
Lingvaj Demandoj ĉe mi	Zonnenhof	36

LA VENDISTO DE OKULOJ

La scenejo prezentas vilaglimon, de kie oni vidas montojn
ne tre malproksime.

Horo: Antaŭ multaj multaj jaroj
malproksime trans la montoj
kaj ankoraŭ pli profunde,
plej profunde, traŭse, fore
vivis unu maljunulo.
surportanta blankan robon.

(Envenas maljunulo el la
dekstra flanko de la
scenejo.)

Kun piedoj tute nudaj
kaj klab' en unu mano,
en alia, valizego,
li alvenas ĉe l' vilaĝo.
Kaj farmisto venas sola.

(Farmisto Gonsaku envenas
el la alia flanko.)

PERSONO: Maljunulo(M), Gonsaku(G), Taromacu(T),

Girosuke(G) kaj Cinjo(C).

G: Ha, ja stranga Maljunulo! De kie venis li ? Kaj kien li
nun iras ? (Al la maljunulo) Sinjoro Avo! Tre laŭmodan
valizon vi portas! Nu, kio estas en ĝi?

M: Mi venis de Arbaro. Mi venis por gajni monon, por vendi
okulojn. Ĉu vi ne volas aĉeti ilin?

G: Kio? Okulojn...vendi vi venis?!

M: Jen vidu, bela okulo, ĉu ne? (Eloriente la duan)Ili
kostas po paro nur sep enojn. Mi neniom povas rabati!

(Tiam aliaj gefarmistoj, Taromacu, Girosuke kaj Cinjo
venas, ĉirkaŭas ilin.

T: (Entigardante) Tio estas tre malkara, samkosta kiel poŝtkarto!

G: Sed Avo, por kio utilas tiuj okuloj?

Cinjo: Per ili oni verŝajne faras bonan supon. (Ŝi etndas manon por preni unu okulon el la valizo.)

M: (Malhelpante ŝin) Ne, ne, sinjorino, ne tuŝu la varon! Ĝi estas viva okulo. Nu, aŭskultu, gesinjoroj! Mi venis longan vojon laŭ ordono de la Dio de Arbaro, kiu volas, ke mi ŝanĝu viajn okulojn kun ĉi tiuj novaj.

G: Eh, kio?! Ŝanĝi la okulojn?

M: Jes, ja!

G: Sensencaĵo! Tia afero....

T: Neniel povas eŝti ebla!

C: Sinjoro Avo! Eĉ se tio estus laŭ ordono de la Dio de Arbaro, neniu homo volus, ke oni ŝanĝu liajn proprajn okulojn, donitajn de la gepatroj, kun la okulpaŝo, kiu kostas nur sep enojn!

M: Sed ĝi alportos al vi grandan feliĉon en la vivo.

Provu ŝanĝi viajn duonputrajn kaj mukonlenajn okulojn kun tiuj ĉi kristale puraj, kaj vi trovos la mondon tute alia. Se vi ŝatus monon, ekzemple, vi aĉetu la okulojn de mon-marko, kaj ĉio en la mondo al vi aspektos mono. Se vi ŝatus belulinon, vi havu la okulojn de bel-marko, kaj via edzino al vi fariĝos al plej bela en la tuta mondo.

Tiu, kiu estas turmontata de melankolio, havu la okulojn de rid-marko, kaj li fariĝos eĉ tro gaj-ridema. Se estas homo, kiu estas tro gaja por iam sperti ploron, li provu la okulojn de plor-marko, kaj ĉio en la mondo ŝajnos al li ploranta. Cetero, kredis min, vi ne sentos eĉ la plej malgrandan doloron je la operacio, kion mi bezonas fari al vi por tio, ĉar mi scipovas magian metodon.

G: Sinjoro, vi tre rapide konvinkis min. Do, vi donu al mi la mon-markajn. Sed elektu la plej bonkvalitajn por mi, kaj tuj faru al mi la operacion.

T: Mi konas la maljunulon kaj scias, ke li estas sorĉisto, li neniam mensogis.

C: Eble li ne trompos nin.

Horo: Li elprenas el valizo la orbrilajn mono-markajn. Lia tondilego akra grince alminacas tiel, ke Gonsaku malgraŭvole sin rotiras du-tri paŝojn.

M: (Tenante Gonsaku per unu mano) Estu trankvil kaj malfermu larĝe viajn okulojn! (Gonsaku ekmalfermas la okulojn sed tuj fermas ilin pro teruro. Ridetante, la maljunulo murmuris magiaĵon. Manipulante kun grincio la tondilegon per la dekstra mano, li laboras super la okuloj de Gonsaku. La okuloj estas intersangitaj.)

G: (Rigardante ĉirkaŭen kun granda miro) Ho, mi vidas, mi vidas, ĉio estas or-monera! Ho, strange! Ho, mirinde!

(Li dancas de ĝojo. Ĉiuj aliaj pro envio sin turnas al la sorĉista maljunulo.)

J: Sinjoro Avo, donu al mi la bel-markajn!

C: Al mi la rid-markajn, mi petas!

T: Mi ja volas la mon-markan por la maldekstra okulo kaj la bel-markan por la dekstra!

M: (Gestante per mano por kvietigi ilin) Atendu, atendu, laŭvice, laŭvice! (Per la tondilego, li faras operacion al ili ĉiuj unu post la alia. La operacio estas finita.)

J: Kia mirindaĵo! Kiel belaj estas la montoj kaj kampoj! Hej, Ĉinjo, via vizaĝo ne plu estas kukurba. Ĝi estas belega kiel tiu de Ĉielanino! Ĉio alia estas sonĝe pitoreska!

C: Ho-ho-ho, ha-ha-ha, hu-hu-hu! Pro kio mi estas tiel gaja? Ha-ha-ha, ho-ho-ho, kiel ĝoja, kiel agrabla!

T: (Kovrante la dekstran okulon per unu mano kaj rigardante ĉirkaŭen nur per la maldekstra okulo) Kio en la mondo okazis? Eĉ la fekaĵo de ĉevalo jen vidiĝas kvazaŭ maso da oro! La ŝtonetoj sur la vojo ĉiuj estas ormoneroj! Ho jes, mi nun provu vidante per la alia... (Malferminte la dekstran okulon kaj kovrante al la alia) Ho, vi, Ĉinjo, ĉu vi estis tiel belega antaŭe? Kiu faris vin tiel gracie feino? (Li admire rigardas Ĉinjon dum Ĝi tiu paŭzas.)

M: Bone, bone, tre bone. La deziroj de vi ĉiuj jam estas plenumitaj. Por gratuli, vi ĉiuj kune dancu. (Taktas frapante per la manoj.)